
遊撃士の私と〇〇〇でアーティストなお姉ちゃん

星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊撃士の私と〇〇〇でアーティストなお姉ちゃん

【Nコード】

N7785Y

【作者名】

星

【あらすじ】

なぜか、私と双子のお姉ちゃんは離れ離れになった。父がお姉ちゃんを連れて、どこかへ行ってしまったからだ。

これはとある双子の物語。

光に生きる妹と、闇に生きていた姉の物語。

零の軌跡、碧の軌跡のネタバレあります。また、原作改変の可能性

があります。

おかあさんのはなし

「ねえ、おかあさん」

「なあに、フエン」

東方人街の外れにある小さな家。そこに、少女とその母である女性が住んでいた。

パチリ、パチリと鳴る囲炉裏を囲み、夕飯を食べていると少女が無邪気な声で母に話し掛ける。

「なんで、わたしにはおとうさんがいないの？」

あまりにも無邪気な問いに母の箸が止まった。

いつかは来ると思っていた問いだったが、あまりにもそれは唐突すぎた。いや、ただ逃げていただけなのかもしれない。

もうこの子も8歳だ。

日曜学校に通い始め、外の世界にも目が行き始めた年頃だ。父がいないことを気にするのは最早時間の問題だっただろう。

母は数回、深呼吸した。決意を固め、口を開く。

「お前のお父さんはちゃんというわ。ただ、お父さんには受け継がなければいけない道があつて、次の世代にその道を渡さなければいけないの」

「せだい？ なにそれー」

「ふふふ、まだ難しかったかな。そうねえ、大事なお仕事を続けていくのに必要なのよ」

「だいじなおしごとって？」

「それは言えないけど……。でも、いつか双子のお姉ちゃんに会えたら教えてもらえるかもしれないわね。お前の片割れに、会えたら

##

お母さんの話によると、私には双子のお姉ちゃんがいるらしい。らしい、というのは私が幼い頃、お父さんが私のお姉ちゃんを連れてどこかへ行ってしまい、私は幼すぎて覚えてないからだ

私と同じ、紫紺の髪と瞳を持ったお姉ちゃん。

結局、お母さんは私にお父さんの仕事を教えてくれなかった。お姉ちゃんが継ぐであろう、仕事。

私は、知りたくて知りたくてたまらなかった。

だから、死に物狂いで特訓し、遊撃士になった。カルバードで推薦状を集め、そして17歳になったときに、準遊撃士から正遊撃士へと昇格した。

その間、お姉ちゃんもしくはお父さんの情報はまったく集まらなかった。

そして——私はなぜか、この街に来ている。
貿易都市クロスベルに。

「お初にお目にかかります。正遊撃士、フェン・マオ。本日より遊撃士協会・クロスベル支部に正式に所属させていただきます——！」

お姉ちゃんはどこだ！（前書き）

早くも暴走回です。

お姉ちゃんはどこだ！

遊撃士協会クロスベル支部へ挨拶を済ませた後、フェンは東通りで情報収集をしていた。もちろん、その情報収集とは顔のある意味見たことがない双子の姉についてだ。
通りかかる人に「私とよく似た人を見かけませんでしたか？」といったものように尋ねる。

「うーん、見てないねえ」

「遊撃士だー！ 人探し？ ぼくも手伝ってあげるー」

「紫紺の髪で美人さん、ねえ。あ、なんかの雑誌で見たかもしれないわ」

しかし帰ってくる答えはやはりめばしいものではなかった。

雑誌って、そんなところで記事になっているくらいだったらフェンもこんなに苦労していない。

今日得られた1番の情報といえば……

「君と似た女性？ ああ、見たことあるよ。歓楽街でさ、たまに見かけるんだ。あ、でもでも君の絶壁な胸とは違ってポインだったよ」

絶壁は余計だ。

1番有力といえは有力だが、姉がポインと評されるほどの胸を持っているわけがない。

一卵性双生児なのだ。

遣伝子はほぼ一緒なのだから、姉がポインなはずがない。

もしそうだとしたら、あまりにも不公平すぎる。

「そもそも、クロスベルにいるのかなあ？」

母がたまにしてくれた話しによると父は各地を転々としていて、出会いは本当に偶然だったらしい。

その運命的な出会いから燃え上がる恋が始まり、両親に反対され駆け落ち。

そしてスピード結婚。

ちなみにできちゃった婚だとか。

どんだけだ。ふざけるな。

駆け落ちして子供まで産ませたくせに家を出ていくなんで、しかも双子を引き離すなんて。

いくらなんでも無責任すぎる。

話しが逸れた。

とにかく問題は姉がこのクロスベルに来ているかどうかだ。

カルバードからクロスベルに来たのは協会本部から要請を受けたのが理由の一つ。でもその最たる理由はカルバードで姉の情報がまったく見つからなかったことだ。

カルバードで掠りもしないのならば、もしかして外国にいるのではないか。

そう考えたからこそ、フェンはここに来た。

来たのだが……時はすでに夕方。

茜色に染まる空が今は目に痛い。

港湾区のベンチにもたれ掛かるとその紅さがよくわかる。

フェンは途方に暮れていた。

見つからなかったのだ。姉の情報も、今日泊まる宿も。

「……はあ、今日はギルドで休むしかないかあ」

新しい土地に来たら、その地の宿に泊まる。これが習慣化したのは、

もちろん姉の情報を求めてだ。

しかしここ最近ではギルドの部屋よりも宿の方が肌——というよりも身体にあってしまった。

ギルドで寝るよりも、宿で寝たほうが疲れがよく取れるのだ。

これによって宿に泊まることがますます定着し、ついには宿がないとダメダメな一種のダメ人間になってしまった。

「むむ、ということは野宿の方が疲れが取れるかも！」

これは名案だ。

フェンの耳はすでに獣並みと言われるまでの聴覚を誇る。つまり、どこかの屋上で寝ていれば勝手に情報が入ってくる。

「おおお！　すごい、私いつも以上に冴えてるかも！　よっし！」

俄然やる気。勢いをつけてベンチから離れ、手は素早くポーチへ。

それから足早に港湾区を南に抜け、東通りへつくと人気のない路地へと入り込む。

「このあたりでいっか。よい、しょっと！」

鉤爪のついた縄を取り出し、家の屋根に引っ掛ける。この手の作業は訓練所で嫌というほど練習した。それこそ、教官役であるベテラン遊撃士に止める！　と怒鳴られても無視して続けた。

おかげで今ではいかなる状況下でも、どんな場所でも引っ掛けることができる。

フェンは家の屋根に登ると、そのまま中央広場方面へと鉤爪を駆使して移動していく。

あるときはターザンのようにぶら下がりながら勢いに任せて移動し

たり、遠くにある建物に行く場合は引つ掛けた縄の上を歩いたりもする。

「ふう、とりあえずこのボロいビルの屋上でいいよね。あ、猫ちゃんお邪魔するよ」

「にゃ」

中央広場の外れにある、ちょっと浮いた古いビルの屋上が今日のフエンの寝床だ。

先住、猫であるらしい猫の頭をなでなでした後、出入口である扉の上へと登り寝袋をさっそく用意。

少し転がってみるが——うん、なかなか悪くない感触だ。

特に、この石の無機質な冷たさが心地好い。

「猫ちゃん、干し肉いるー？」

「にゃ」

夕飯の干し肉をポーチから取り出し、猫に見せるとそっぽ向かれる。やっぱり煮干しじゃないとダメなのかな？　と思いながらフエンは干し肉を口に含んだ。

「……………うま」

ブラックペッパーのピリリとした辛さがたまらない。

（ちっちゃい頃、おいしすぎて毎日食べてたらお母さんに叱られたなあ）

懐かしい思い出に浸りながら、屋上で寛ぐ猫を観察する。

おお、伸びた伸びた。

これで首が伸びたらろくろ首だ。

おっとそうだ。この猫ちゃんには頼みたいことがあった。

「あ、そうそう。明日朝4時に起こしてね、猫ちゃん」

「……………」

完全なる無視。フェンの言葉など聞く価値もない、とばかりに黒猫は背を向け、ついには毛繕いまで始める。

これは信頼されているのか、いや違う。舐められているだけだ。

（こうなれば、最終手段っ！）

一度で良い。猫に起こしてもらいたい。

その願いがフェンにある奥義を発動させた。

それは――

「お願いします、猫様。私を朝4時に起こしてください」

膝を折り、両手と頭を地面にこすりつける。つまりは土下座だった。

「じゃ」

特務支援課

特務支援課の朝は早い。

支援課が設立されて初日に決めた料理当番の順番通りに沿うならば、今日の朝ご飯の当番は我らがリーダー、ロイド・バニングスである。

「ふあゝ……さあて、今日は何にするかな」

昨日の夕飯はティオが作った肉鍋だった。こつてりしていたが支援要請を終えたロイドたちにとっては明日を円滑に過ごすための良い栄養分となり気になるほどではなかった。

しかし朝までこつてりしたものでロイドやランディは良いかもしれないがエリイやティオの女性陣はキツイかもしれない。胃もたれなどがあつては支援課の仕事の効率は格段に下がる。そのうえ、手配魔獣の依頼だった場合は命に関わる。

ならば、朝はカルバードの典型的な朝ご飯である豆腐を使った味噌汁と焼き魚が良いかもしれない。

午前5時に起床し、朝ご飯のメニューについて考えながらロイドは一階へと下りた。

真っ直ぐ厨房へ向かい、下ごしらえをして、調理に取り掛かる。

味は薄すぎず濃すぎず。あくまでロイド自身の舌を基準にしたの味付けだが、今まで文句が出たことは一度もない。

文句、といえばランディが昼食にふざけてUマテリアルを出してきたときはすごかった。

ティオがロバート主任に対する毒舌の限りをランディに尽くし、最

最終的には土下座までさせた。

どうやら昨夜、ランディはティオにみつしいをケチャップで描いたオムライスを作ると約束していたらしい。

その約束を破った挙げ句にウマテリアなんて食えないものを空腹のときに出され、ティオの堪忍袋もブツリと切れたというわけだ。

ところでこのウマテリア。ランディがわざと食卓に並べたわけではなく、なぜか偶然でできてしまったものだったとか。

もしかしたら食べることができのでは、と時間がなかったのも手伝って出してしまったのだとか。

「ランディの二の舞は踏まないようにしないとな」

下ごしらえを終え、ロイドは火を扱う調理へと移る。

それから朝食を作り終えたと同時に支援課のメンバーがリビングへと集まり、ほどなくして朝の食卓が始まった。

「これは、東方のお料理かしら？」

味噌汁をスプーンで掬い口に運んだエリイが興味津々に尋ねる。

本当に、エリイはなにをするのも優雅だなあと思いつつロイドは頷いた。

「ああ。カルバードの朝の定番なんだ。叔父さんの家にいる頃に教わってね。よかったら教えるよ」

「じゃあ、明日のお昼にでも教えてくれる？」

「ああ、もちろん」

そんなこんなで朝食を終え、端末で支援要請を確認する。

今日は手配魔獣が2件。雑用が2件だ。

「また延滞本の回収ですか」

呆れた、とばかりにティオは呟く。

あまりにもいい加減すぎると言ったところか。これでまたレイモンド捜査官が延滞していたら申し訳なさすぎる。ランディもそう思ったのか

「また身内が延滞してんじゃねーだろうな」

「それは、ないとは言切れないわねえ……」

「とりあえず、コッペに餌をあげたら行こう」

#

「はい、コッペ。ねこまんまです」

「にゃあぁ」

屋上でひなたぼっこをしていたコッペに餌を上げると、嬉しそうな声を上げた。

ガツガツと食べ終わると、コッペはいつものように身を低くしてお礼の品を取りに行こうとする。

「にしてもよお、こいつどっからクオーツなんてもの持ってくんだ？」

「そこまでは私にも……まあ、コッペですし。人の入れないところ

にも入っていきますから」

ぴょん、と身軽な動きで飛び上がるコッペ。コッペが戻ってくるまで談笑でもしよう、そう思っていたが――。

「にゃん」

「げふっ！」

なにか、猫に思いきり腹に乗っかられたときのような呻き声が、屋上に響いた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「なあ、今、なんか聞こえなかったか？」

続いた沈黙をランディが打ち破る。

「聞こえました。どうやら、上に誰かいるようです」

「おれが見てくるよ」

ロイドは慎重に屋上の高所に近づく。他のメンバーは万が一のために武器を構えた。

高所の淵になんとか手を掛け、よじ登る。すると、そこには紫紺の短い髪を持った少女がいた。

「うつうつ……内蔵でちゃうよ猫ちゃん。優しく起こしてって言うたじゃないかあ」

お腹をさすりながら身を起こす少女。同じくらいの年の少女にロイドは呆気にとられた。

まさか、同じ年の少女がこんな屋上の高所で寝ているなんて誰も思わないだろう。

「ん？」

ロイドの気配に気づいたのか、少女が振り向く。

それから、ロイドの存在を認めた少女は寝袋から出ると正座をして丁寧に挨拶してくれた。

「どうもお邪魔しました。フェン・マオです」

###

「ということは、泊まる宿がなかったから支援課の屋上にいたってことですか」

「うんうん。そーゆーこと。あ、敬語じゃなくても良いよロイドくん。多分年近いし」

猫——コッペに踏み付けられ住人に見つかってしまった後、彼らに説明を求められたためフェンは屋上で寝るまでの経緯を話していた。話し終えると住人の彼らは目を大きくして驚く。

「だからって普通、ひとんちの屋上で寝るか？」

呆れた、と手で額を覆うランディに頷くエリイ。

酷いなあ。カルバードじゃ常識なのに。お母さんも野宿の基本は屋上だって言ってた。

「というか、どうやって屋上まで？ 誰かが通ったような足音はしなかったけれど……」

「ちつつち。エリイちゃん甘いね。屋根伝いに来たに決まってるじゃん！」

「得意げに言うことじゃないだろ。一応、不法侵入だぞ」

「お堅いぞロイドくん！ 警察じゃあるまいし、ここは笑って流さないと」

笑え笑えと手で変顔を作る。

すると、みんな一様にため息を吐いた。あー、なんか変なのに会ったやつたなあ、と言わんばかりの態度だ。

空の青さが恨めしい。

くそっ、そんな爽やかな青空を見せてどうする気だ！

私が痛い子みたいじゃないか。

くうー、と変顔のままのフェンが一人心中で唸っていると、立ち直ったロイドが一歩前に出た。

右手になにかを持ちながら。

「一応、おれたちは警察だ」

毅然とした声でロイドは改めて役職を言う。

一瞬ポカンとしたフェンだったが、いやいやまさかと首を振った。

しかしロイドの右手に握られているのは紛れも無く警察の証である手帳。

「……まじ？」

「マジだ。今回だけは見逃すから、もう他人の家の屋根で寝るのは

やめるんだぞ？」

そんな約束誰がするもんか、と首を振ろうとすると、ロイドの真摯な視線が刺さる。

フェンはしばらく唸っていたが、ロイドの強い視線に渋々頷く。

「うっ……。わかったよー。でもなんで警察がこんなにボロいビル使ってるのさあ。反則だよお」

「そ、それを言われるとちょっと……」

「言いづらいわよね……」

「ま、特務支援課がちょっと変わってるってことさ」

「仕事内容はほぼ遊撃士の真似ごとですから」

苦い顔をして言うロイドたち。フェンは首を傾げた。

「遊撃士の真似ごとなんかしてどうすんの？」

不思議に思ったことを尋ねると、ロイドたちは一瞬驚愕し、すぐに納得したように頷く。

「そうか、フェンは旅行で来たばかりだから知らないのか」

「んん？」

勝手に旅行者扱いされたことが引っかけたがそのまま流す。今は遊撃士の真似ごと部署の理由が知りたい。

「クロスベルでは警察の評判が悪く、このままでは市民の信頼を完全になくしそだったんです。そこで、少しでも遊撃士の人気を引っ張ってこようという訳です」

「なるほどなるほど。それが特務支援課なんだ——って、遊撃士と

「いえばもう時間ヤバイ！」

突然騒ぎ出したフェンに支援課の面々は一様に頭に疑問符を浮かべた。

それに構わず、むしろそんな余裕など彼女には一切なくフェンは懷から鉤爪付きのワイヤーを取り出して近くの屋根に引っ掛ける。

支援課が呆気にとられる中、フェンは屋上の地面を蹴る。

「じゃ、まったねええええ！ あ、あと私と似た人見掛けたら連絡ちょうだい」

とん、と軽い身のこなしで西通りに下りるフェン。

ブンブンと手を振って中央広場へと走り去っていく彼女の紫紺の髪を見つめながら、支援課は口を開く。

「嵐のような人だったわね……」

「ああ、というか連絡頂戴って……」

「知らねえよって話しだよな。美人なのにもったいねえぜ」

「朝なのに、どっと疲れました」

特務支援課（後書き）

はい、破天荒な妹ちゃんでした。

そして特務支援課のみんなの言動がいまいち掴めないという。
あれ、一番馴染みのある四人なのになあ……

ここまで読んでくださり、ありがとうございました！

アルモニカ村

「ミシエルさん、なんで市外の依頼ばつかなんですか？」

「遅刻した罰、と思つてちょうだい」

3時間ほど遅刻したフェンは、呆れ顔のミシエルに不満をぶつけた。今日は依頼をこなしながらお姉ちゃんの情報を集めるつもりだったのに。

どうやら、お姉ちゃんを探すための手段が今回は障害になりそうだな。なんてけしからんことだ。

「ミシエルさん」

けしからんことをするギルドの受付に、真剣な顔で話しかける。ミシエルもフェンの纏う空気が変わったことに合わせて、身乗り出した。

「なにか、重要な情報でも手に入つたの？」

「ええ」

真剣に切り返す。しかし、フェンの頭の中は疑問符でいっぱいだ。

「実は……」

「実は……？」

ピリピリした空気。

東通りで遊んでいる子供の声が、やけに大きく聞こえる。彼がなにを期待しているのかはフェンには理解できないが、そんなものは関係ない。

「アルカンシエルのチケット、前にいた支部の方に頂いたんです」
「……………は？」

緊迫した空気が妙な形で破られる。あまりにも日常的過ぎる話題に変えられミシエルの思考回路が停止した。

フェンはその隙を逃さず、持ち前の身体能力で出入口へと素早く移動。

「てなわけでアッデュー。私はこれからアルカンシエルの公演が始まる時間まで市外を巡回してきますんで。あ、掲示板の依頼は適当にやっときますんで安心してくださーいっ！」
言いたいことだけ言って、ギルドから出ていく。
数秒後

「ちよっ、待ちなさい！ フェンっ！」

珍しく、ミシエルの怒声がギルド内に響き渡った。

###

「そうそう、今朝ギルドから男性のすごい怒鳴り声が響いたの。びっくりしてじゃがいも落としちゃったわ」

東通りの人から気になることを聞いたロイドたちがギルドを訪ねると、異様な空気が立ち込めていた。

呆れとか、どうしようもない憤りとか、つい最近ロイドたちも体験したような感じのする空気。

しかしそれはチリンチリンという来客を告げる鈴の音によって緩和された。

「はい、いらつしゃい——ってロイドくんたちが」

「どうも、こんにちは。ミシエルさん」

顔を上げて営業スマイルを作るミシエル。だがその顔はどこか疲れきっていた。

ティオも持ち前の感応力で察知し、

「どうしたんですか、ミシエルさん」

「うーん、そのねえ。共和国から新しい子がきたのよ。一応、優秀な子がね……」

「一応って、ずいぶん強調するっスね」

「いろいろと厄介な子でね。でも、優秀なのは本当よ。あなたたちも頑張らないと、どんどん仕事持ってかれちゃうわよ。あの子、嗅覚と聴覚が異常なぐらい良いらしいから」

「嗅覚と聴覚が良い、というと？」

ロイドが訪ねると、ミシエルは大きなため息をついた。

「あの子、事件が起こる前にその元を解決しちゃうのよ。手配魔獣なら人に害を与える前に始末するし、落とし物とかだったら持ち主

が依頼を出す前に届ける。最近の大きな出来事だと、共和国のテロ組織が活動を始める一歩手前で阻止しちゃったとか」

そう聞いていたからどんな子なのか楽しみにしてたら、あんなに破天荒な子だったなんて。

ミシエルは眉間のシワを伸ばす。ロイドたちはあまりのありえなさに啞然とした。

つまりこちらに来る支援要請そのものが来なくなる可能性があるのだ。

「あの、東通りの方から怒鳴り声が聞こえたと伺ったんですけど、それは……」

「ああ、外まで聞こえちゃってたのね。今話した子のことではないのあったの。まあ、会えばわかるわ。とんでもなくふざけた子だから」

これ以上、その人物のことについて話したくないとばかりにミシエルは口を閉ざした。

疲れきった彼の様子に、ロイドたちは相当厄介な人なんだろうなあ……と同情した。

###

ギルドで厄介者扱いされている頃、フェンはアルモニカ村に来ていた。

のどかな田園風景に、風に揺れる若葉の木々たち。鳥の囀りが奏でる自然のハーモニーに聴き入りながら、特別にパック詰めしてもらったオムライスを口いっぱい頬張る。

「んーっ！ うまあ！ いっやー、自然の中で食べるオムライスは最高だねっ」

村長宅の近くの木に寄り掛かるフェンは喜びの声を上げた。

お姉ちゃんの情報は相変わらず手に入らなかったが、行く途中で巨大甲殻魔獣を倒したお礼にオムライスがもらえた。

持つべきものは刀。売るべきものは恩。母の教えは真実だ。

「お前もオムライスを食べたら良いのにね。星嵐」

腰に下げた相棒の柄を撫でる。

星嵐はフェンが11歳の頃、母から譲り受けた刀だ。碧く美しい刃の切れ味はどんな敵をも斬ってくれたし、どんなに心細いてきでも一緒にいて、輝いてくれた。

フェンにとって、星嵐は最早ただの刀ではなく、家族だ。

だから、オムライスの素朴な味を共有できないのが残念でたまらない。

フェンは最後の一口を胃に流し込むと、すくっと立ち上がった。短パンを叩いて、真っすぐ宿へと向かう。

「クロスベルは賑やかで楽しいけど、やっぱり田舎の方が静かで落ち着く落ち着く。田舎最高！ やっほーい」

元気良く宿のドアを開ける。

さきほどのオムライスをもらった宿は昼時で混んでいる。農作業から戻ってきた人たちの視線がフェンに集まった。

「おお、フェンさんか」

大声に怪訝な顔を浮かべていた男たちは厄介な魔獣を倒してくれたフェンだと気付くと、一斉に笑顔になった。

「さつきはどうもありがとうございます。オムライス、おいしかったですよ」

「そりゃあ良かった。魔獣を倒してくれた恩人に、マズイもんは出せねえからな。宿の部屋、空いてるけど泊まるか？」

「もちろん泊まります！ どの部屋ですか」

「1番奥の部屋だよ」

##

田舎の夜は早い。

アルモニカ村の空には丸い月が浮かんでおり、村を柔らかい光で照らしている。

フェンは、宿の屋根で月を眺めながら星嵐の手入れをしていた。

「月が綺麗だね」

丹念に丹念に星嵐の刃をチェックしていく。部屋の中でも一通り見たが、星嵐の碧い刃に傷はない。

月の光を反射して幻想的な輝きを放っている。心無しか、いつもよりその輝きは強いように感じる。

「星嵐ってさ、変わった色の刃してるよね」

当然、返事はない。しかしフェンにとってそれは些細なことだ。星嵐は話するための口がないだけで、ちゃんとフェンと会話をしてくれている。

「いやいや。他の刀より断然綺麗だねって。それに、星嵐の刃を見terると落ち着くんだ」

刃にすーっと指を這わせる。普通の刀であれば、フェンの指は切れ、赤い血を滴らせていただろう。しかし、碧い刃はフェンの指を切ることはなかった。代わりに火傷しそうなほどの熱を指に感じる。フェンは笑った。

「あ、照れてる？ ふふん、このフェン様のたらし技術に恐れを為したな！ あ、痛い痛い。ごめんって。私が悪かったよー」

急に指の皮が切れた。

どうやら星嵐を怒らせてしまったらしい。

さてどうしたものか。星嵐のツンデレっぷりをこのまま堪能するか、それとも星嵐のストレス発散に魔獣退治にでも行くか。

ザッ、ザッ――

「ん……？」

ふと聞こえた奇妙な足音にフェンは星嵐から目と指を離して集中する。

前の支部でクロスベルのことは聞いている。なにが起こってもおかしくない都市だと。

キーン

今度は掠れた音が聞こえた。アルモニカ村の出入口近くからだ。犬特有の息遣い。そして獣臭。

まさか魔獣が村の中に？

フェンは屋根から飛び降りると、すぐさまアルモニカ村の出入口へと向かった。

それはもう、嬉しそうに。

アルモニカ村（後書き）

時間軸は零の第一章からにしました。

ところでエステルとヨシユアっていつ頃来たんでしょう。
やっぱり警備隊からの依頼が来る一日くらい前ですかね？

招かざる犬

魔獣と思われる気配を感じ、アルモニカ村の出入口に向かうと、三匹の黒い犬が農具や食糧庫を荒らしていた。

「ひゃっほーっ！」

「バウッ！」

フェンはまず、食糧庫の犬に跳び蹴りを食らわせる。

ブーツに覆われた足は犬の脇腹に直撃。

犬は数メートル吹き飛ばされ、すぐそばにある木に激突した。

「よっしゃ！ 星嵐！ こいつら三匹で機嫌直してくれるよね！？」

空中でバランスを取り、星嵐に声を掛ける。

星嵐は一瞬だけ輝きを強めた。

機嫌を直してくれる、とのことだ。

そうなればフェンにも気合いが入る。正直、そろそろアルカンシエルの劇を見に行きたいが……恩を売っておくのも悪くない。

時間はまだある。

フェンは着地すると同時に地を強く蹴った。

ようやく立ち上がった犬に体勢を立て直す時間は与えない。さっきの音を聞き付けて他の二匹も集まってきた。

「母さん直伝！ 一ノ太刀、碧の延べ棒！」

勢いを殺さず、刀を横に一閃。

犬の後ろに着地すると、遅れて犬が倒れ込む。

二匹の犬が遅れてやってきた。

フェンは飛び掛かる犬たちの攻撃をひらりひらりと避けつつ、懷からエニグマを取り出す。

戦術導力器。魔法のような現象を起こせるコンパクトな機械で、セツトされた結晶回路を繋ぐラインをなぞると駆動開始する。発動までに多少時間がかかるが、非常に強力だ。

「星嵐、手伝って！ エニグマ駆動」

ガチンツと耳の横へと噛み付いてきた犬をささり避けてその面を殴りつける。

休む暇なくHP3、回避3の嵌め込まれたラインをなぞった。導力器は淡い光を放ち、駆動。内部に充填された導力が外界に干渉する。

本当ならばもう少し時間がかかるのだが、フェンには心強い相棒がいる。

星嵐が輝きを増した。

外界への干渉が途端に終了。

あとは本人の声紋で発動する。

「アイスクリーム！」

「キャンツ！」

気の抜けるようなアイツ名と共に、犬たちの頭上に氷のつぶてが現れ、犬の体を強打。

犬は悲鳴を上げると、敵わないと知ったのか逃げていった。

「ふむ……。おかしいなあ……」

村の外へと走っていく犬を見送りつつ、フェンは鼻の頭を掻いた。

今の犬、妙に煙草臭かったような……。

「んー……ま、あとで村長さんとミシエルさんに報告しとこ。それより今はアルカンシエルだね！ あ、でもアルカンシエルって星嵐と一緒に入れるかな？」

ぶん、と星嵐をふり回しながらクロスベル市へと向かう。
アルカンシエルに入れるか否か。星嵐はぼんやりと光る。

「入れないのは残念だけど仕方ないって？ ノンノン、星嵐は遠慮しすぎだよ。大丈夫、このフェンさんにかければお茶の子さいさい。余裕で入れるよ！ 決めた！ 星嵐と絶対に一緒に入る！」

決意を固め、ニカツと笑うフェン。

月明かりの下、星嵐は嬉しそうに淡く点滅した。

##

アルカンシエルの舞台裏へとアーティストたちが向かった後、新人

のリーシャとニコルは受付の手伝いをしていた。

貴賓席を使う客には支配人のバルサモが接待し、リーシャたちがやる仕事といえばチケットの確認と危険物の持ち込みを丁寧に断るところだ。

リーシャは左側に、ニコルは右側に別れて客からチケットを受け取る。

一ヶ月ほど前から手伝っているため、この作業にも大分慣れた。稽古も何度か失敗しながらも徐々に上達しているのが実感できる。怖いくらい、物事が順調に進んでいた。

二十人目からチケットを受け取っていると、リーシャはニコルの方が何やら騒がしいことに気付く。

「いや、武器の持ち込みは禁止されてるんですって」

「知るかぁー。私は星嵐と一緒にアルカンシエルの劇を見るんだー

っ！ 離せチンチクリン！ セクハラだぞ！」

「いや、あの、違いますって！ チンチクリンは余計です！」

どうやら、武器を所持したままアルカンシエル内に入ろうとしている者がいるらしい。

悪意や殺気の類いは感じないが、万が一ということもある。

無理矢理入ろうとしてる点から遊撃士はありえない。彼らの中には個性の強い者もいるが、基本的に民間のルールは守る。

他に武器を所持できる職業は警備隊や軍隊、警察。教会の騎士。はたまた、自分のような裏稼業。

リーシャは警戒しながらニコルのもとへと向かった。

ニコルに詰め寄る、短い紫紺の髪の少女。

「ニコルさん」

「リ、リーシャ」

よほど困っていたのだろう。後輩であるリーシャにニコルは困惑七割、先輩としての威厳保持三割の視線を向けてきた。

「え、と、私に対応しましょうか？」

セクハラ、という単語を聞くに武器を所持したまま劇を鑑賞しようとしている客は自分が女性であることを利用しているようだ。

ならば、同じ女性のリーシャが対応したほうが効率が良い。それに、武器を持っているが故の危険もある。ニコルはリーシャの提案に逡巡し、しばらく考えてから申し訳なさそうに、そして悔しそうに場を譲った。

「ごめん、頼むよりーシャ。僕はチケット回収してるよ」

そそくさと去っていくニコルに「お願いします」と言って、リーシャは武器を所持している客に顔を向けた。
そして予想外の容姿に言葉を失った。

「え……」

「ん？ あれ……」

同じ背丈。同じ髪と瞳の色。容姿。

髪の長さ、胸の大きさ以外、同じだった。

不気味、とは思わなかった。ただ、酷く懐かしい。

「……………お、おねえ、ちゃん？」

驚愕に満ちた声で呼ばれ、リーシャは戸惑う。
知らない。

おねえちゃんって、なに？

なんで同じ顔をしてるの？

なんでこんなに、安心してるの？

ぐちゃぐちゃだった。真っ白で、赤だとか黒だとか黄色だとか、頭の中でぐちゃぐちゃに混ざり合う。

「あ……え……え……？」

目の前の同じ顔の少女が、戸惑うリーシャを見て不安そうに見つめてくる。

どうしたらいいのか、お互いにわからない。

ニコルはリーシャの代わりにチケットの確認をしていて、異変に気づいていない。

観客の話し声がやけに鮮明に聞こえてから、およそ数分。少女は精一杯不安を押し隠して口を開いた。

「も、もしかして、お父さんから聞いて、ない？　じゃ、じゃあさ、公演終わってからお話しよ？　いい、よね？」

「え、あ……う、うん」

戸惑いが消えないまま、リーシャは頷いた。

知らないけど、この子を悲しませたくはないと思ったから。

少女は安心したようにはに cand、S席へと向かっていった。

混乱が収まってから少し経ち、観客が全員席についた頃、リーシャは「あ」と声を上げた。

しまった。失敗した。

「武器、結局持ち込ませちゃった……」

招かざる犬（後書き）

リーシャとの再会の回、とても悩みましたが出しちゃいました。

リーシャはフェンについて何も知りません。多分、突然双子の妹がいるとしたら結構戸惑うんじゃないかなーと思ったので心理描写には素人ながら気を使いました。アドバイスがありましたら、遠慮なくどうぞ！

待ってます！

では、ここまで読んでいただきありがとうございました。

姉と妹

無駄のない筋肉の動き、音楽と絡み合う舞。まばゆい光を放つ舞台を、フェンは感動半分、不安半分に観ていた。

なるほど、確かにアルカンシエルの舞台はこのクロスベルで最高の娯楽だ。

事実、不安なしにこの舞台を観ることができたなら、フェンは思わず立ち上がって魅入っていただろう。

「お姉ちゃん……」

アルカンシエルの出入口で出会った、そっくりな顔をした少女。

彼女が双子の姉であることを裏付けけるものなどないが、それでもフェンには妙な確信があった。

雷が体を貫いたような感覚が、告げたのだ。

この人は間違いなく私のお姉ちゃんだと。

（でも、お姉ちゃんは私のことを知らなかった。それどころか、すっごく戸惑ってた）

双子の妹『なんか』いるわけがない。

同じ紫紺の瞳を持つお姉ちゃんは、フェンを否定していた。いや、恐がっていた。

まるでいけないことをして、その発覚を恐れる子供のように。それが意識的なものなら良い。

でも、お姉ちゃんは無意識に恐れていた。

それが少しだけ、寂しかった。

「はぁ……。なんていうかさー、双子って怖いね」

一目見てしまえば、相手が何を思っているのかすぐにわかってしまう。

お姉ちゃんも、一度落ち着いて思い返せば、フェンが何を思っていたのか曖昧にわかってしまうだろう。

ああ、失敗した。

本当に失敗した。

なんで、私は、真っ先に胸を見て手を伸ばしかけてしまったんだ。これじゃあ姉に会って始めて抱いた感情が嫉妬だって、一番に思ったことが『揉みたい』だってばれてしまうじゃないかっ！

「ううう……。どうしよう。ばれたら第一印象が最低変態な双子妹になっちゃうよあ。星嵐、どうしよう」

半泣きになりながら柄を叩く。

星嵐は柄を熱くし、淡い光を一回だけ放つと沈黙した。

「アルカンシエルの舞台見てるんだから邪魔するな？ ひどい！ 酷すぎるよ！ 誰のおかげで鑑賞できると思ってるのさ！ え、フェンのおかげだってわかってる？ でも相談事は後にしてくれ？ うわああああん！ 星嵐の薄情者おっ！」

後から思えば、それだけアルカンシエルの劇が素晴らしかった。けれど、フェンはこのとき初めて星嵐をどこか遠くに投げてしまったと思った。

#

私は、なんでこんなに恐がってるんだろう。

公演が始まり、陽気な音楽が流れている劇場内をリーシャは掃除していた。

綺麗になっていく床と違い、心の中はもやもやしたもので覆われている。

リーシャはじわじわとした恐怖を感じていた。

なにか、なにか取り返しのつかないことをしてしまったかのような

（なんで、そう感じてるんだろ。あの子とは今日初めて会ったはずなのに）

取り返しのつかないことなんて、できるはずもない。
きつと気のせいだ。

リーシャは自分に無理矢理言い聞かせて、劇場内の掃除に専念する。

すべては、公演が終わってからだ。

#

公演が終わってしばらく経った歓楽街は、変わらずにぎやかだ。

アルカンシエルはライトアップされて輝き、昼間とはまた違った荘厳さを感じさせる。

フエンは、広場のベンチに座ってアルカンシエルを眺めていた。

これから長年、顔を合わせることができなかった姉に改めて会い、話すのだと思うと不思議な感慨がある。遊撃士になって共和国中を探し回り、それでも見つからなかった姉。まさか偶然観にきた劇場にいるとは思わなかったが。

おかげで心の準備をする時間がなくて焦りに焦った。

「でも、本当に会えて良かった」

もしかしたら、二度と見つからないんじゃないかと思ったから。

お姉ちゃんにはいろいろと聞きたいことがあるし、お父さんのこともある。

もちろん、私にだって話したいことがある。お母さんとの馬鹿話とか、遊撃士の仕事で体験した面白いこととか。けれど、今は落ち着こう。

話す時間はたっぷりあるのだから。

アルカンシエルの入口がカシヤ、と軽い音を立てて開いた。

その奥からは、受付のお固い緑髪の人。舞台に出てたオレンジ髪の女の人に、金髪の男性、黒髪の男性。歌を歌ってた濃い紫色の髪した女性が出てくる。

そして、最後に共和国でも有名なイリア・プラティエと、控えめになにかを断るお姉ちゃん。

遠くから見る限り、どうやらイリアとお姉ちゃんは仲が良さらしい。耳を澄ませば、会話の内容が聞こえた。

「リーシャ、あんたもしかして好きな人でもできた？」

「なっ、す、好きな男性なんていませんよ！」

唐突なイリアの質問に、その手の話題に免疫がないのかお姉ちゃんは顔を真っ赤にして否定する。

イリアはさらに畳み掛けた。

「あつらあ〜？　じゃあなんであたしのメゾンに来ないのよ」

メゾン……………部屋か！

フェンはカツと目を見開いた。つまり二人は気軽に寝泊まりをするほどの仲良し。

イリア・プラティエ、なんと恐ろしい。

お姉ちゃんと仲良くしたいイチヤつき隊隊長のフェンの中で、イリアが要警戒人物に認定された。

フェンがイリアに対し、憤慨していることなど露知らず。お姉ちゃんは申し訳なさそうに頭を下げる。

「それは、えと大事な用事が……」

「ふうん……ま、良いわ。あとでちゃんと紹介しなさいよ!」

納得いかないが、無理矢理聞き出すのも憚れる。イリアはお姉ちゃんの大事な用事の相手の紹介予定を取り付けると颯爽と去っていった。

「いや、だから違いますって」

闇の中でもなお光を放つイリアの後ろ姿に、お姉ちゃんは呆れ混じりに呟いた。

それから、お姉ちゃんは表情を引き締めるとフェンの方へとまっすぐ向かって来る。

明かりの当たるベンチに座っていたフェンは隣を開けた。しかしお姉ちゃんは警戒しているのか、ベンチには座らず立ったまま口を開く。

「あの、お姉ちゃんって、どういうことですか?」

本能で理解できても、理性は納得しない。

お姉ちゃんはほとんど決められた会話をスタートさせた。フェンも台本を読み上げるように返す。

「そのまんまだよ。お姉ちゃんは、私の双子のお姉ちゃん」

「証拠は、あるんですか」

「んー……顔と直感。あ、あと歳かも! お姉ちゃん何歳? 誕生日は?」

「今年で十七歳になります。誕生日は——」

「うん。私もそうだよ。十七歳で、お姉ちゃんと同じ誕生日」

にぱつとフェンは笑う。

お姉ちゃんはいふう、と一息ついた。それから、尋ねた。
さきほどよりも、真剣な表情で。

「じゃあ、貴女は私について、どれだけ知っているんですか」

賑やかな歓楽街の一角で、沈黙が広がった。

フェンがお姉ちゃんについて知っていることはそれほど多くない。
双子の姉であること。

お父さんの家業を継いでいるだろうこと。

そして、アルカンシエルの関係者であること。

かの有名なイリア・プラティエと仲が良いこと。

多分、それくらい。

あまりにも表面的なことしか知らない。

だからフェンは正直に答えた。

「全然知らないよ。好きな食べ物も、好きな遊びも、色も、私知らない。お姉ちゃんが大事に大事に守ってる秘密も知らないし——
なにより、名前も知らない」

偽りのないまっすぐな答えに、お姉ちゃんはようやく安堵の息をついた。

そうだね。知ってるはずないよね。

そんな類いの安堵。お姉ちゃんの表情が和らいだ。

フェンはその表情を見て唇を尖らせる。

血縁以外は無関係な繋がりであることを確信し、喜ぶお姉ちゃんの様子がかんに障る。

（むう。なんだよー。もう、なんだよおー）

今まで全然会えなかったけど、一応双子なのに。
知らないことにそんな安心しなくていいじゃないか。
悔しい。悔しいからフェンは人差し指をお姉ちゃんの鼻先に突き付
けて叫んだ。

「私の名前はフェン・マオ！好きな食べ物は麻婆豆腐！好きな
遊びは球当て！んで色は星嵐の碧色！お姉ちゃんはっ!？」

「え、ええ!？」

「好きな食べ物!」

「え、と特に――」

「なしは禁止！ついでに敬語も禁止!」

「はう、えと、龍老飯店のお料理……かな」

「好きな遊びは!？」

「……………的当て?」

「なんで疑問形？まあいいや、色!」

「お、オレンジ」

「みかんおいしいよね!。よし、じゃあメインディッシュ!」

フェンは指を下ろし、代わりに手を差し出した。

お姉ちゃんは不思議そうにその手を見て、言葉の続きを待っている。

「お姉ちゃんの、名前は?」

お姉ちゃんは顔を上げてきよんとしている。

かわいいなあ、と思いながらフェンはお姉ちゃんを見る。やがて、
お姉ちゃんはようやく差し出された手の意味がわかったのか、満開
の桜のような笑みを浮かべた。

「リーシャ。リーシャ・マオだよ」

「うん！ これからよろしくね、リーシャお姉ちゃん」

差し出した手が握られた。

初めて握ったお姉ちゃんの手は細くて意外と固い。でも、とても温かった。

ようやく、姉妹として始まることができ、フェンは腕をつい振り回す。

やってからしまった、と思ったがリーシャお姉ちゃんは合わせて腕を回してくれた。ちょっと恥ずかしそうにしているとところが新鮮だった。

とても、幸せだ――。

（嬉しかった。でも、なんでだろう。後ろ暗い思いが消えない）

その理由を知っているのは、とある日人形と入れ替えられた少女のみ。

姉と妹（後書き）

はい、ここからリーシャさんとフェンの物語は始まります。
ある意味この話しが序章ですね。

いろいろと伏線を残した回でしたが……もうネタは読めたって人は
正解かどうかは内緒、碧の軌跡まで持ち越しということでお願
います。

では、ここまで読んでいただきありがとうございました。

誤字脱字やここちよっとおかしくない、というところがありました
ら遠慮なくどうぞ。

心待ちにしています。

サボりはいけません

「——と、いうわけです。村に侵入した狼型魔獣は早い段階ですべて追い払ったため、被害はさほど出ていません。と、いうわけで！午後からは好き勝手させてもらいまーすっ！」

ひゃっほーい、と上機嫌にギルドから出ていこうとするフェンの手をミシエルはすかさず掴む。

「ま・ち・な・さ・い。全然報告になってないわよ！ なのに、狼出たんで退治しましたって！？ というわけの前を省略しないでちようだいっ」

今度は逃がさない。

鬼もビクリな形相でフェンを睨みつけるミシエル。オカマなだけに迫力が半端ではない。

しかしフェンはものともせずゆるゆるな態度で切り替えした。だって、私のお母さんの方が怖いし。

「まー、まー、気にしたら負けです。度が過ぎるとハゲますよ。ミシエルさん、B型ですよな？ 知ってます？ B型ってつぺんに数本残るハゲ方するんですよ」

「あなたは太雑把過ぎるのよ！ それに、あたしはO型よ！」

あ、やっぱりつぺんに残るのは嫌なんだ。でも残念。

「O型はツルツパゲ」

「ノオーッ！」

あまりの絶望に、ミシエルは頭を抱えた。といっても片手はガツシリとフェンの手首を掴んでいる。ふむ、油断も隙もない。

手首を掴む手は力強く、腐っても男なんだなとフェンは思った。

「そうそう、ハゲといえば魔獣が出たのはアルカンシエルの公演が始まりちよつと前です」

「全然話し繋がってないわよっ！」

「めんどくさいのでツツコミはなしでお願いしまつす」

「誰がツツコミを入れさせてるのよ……。はあ、で？ その狼型魔獣はどんな姿をしてたの？ 色は？」

ふざけた空気を一気に真面目なものへと変えるミシエル。その辺はさすが、魔都クロスベルで受付をやっているだけのことはある。

「色は黒。もしくはそれに近い色。数は三匹で、食料庫とか畑を荒らしてたかも」

「なるほど……。餌不足で山から降りてきたのかしら」

「いや、それはないと思いますよ」

突然の否定にミシエルは驚いて目を開く。フェンは朝調査した被害の数々を思い出しながら言葉を続けた。

「食料目的にしては畑の野菜に食べられた痕跡はありませんでした。食料庫内の物にしても同様です。それに――」

「それに？」

フェンは考え込み、たどたどしい口調で言う。

「魔獣が入ってくるとき、音が聞こえたんです。キーンって、掠れ

た音が」

「掠れた音？」

「はい。どこかで聞いたことがあるようなー、ないようなー。ううん、思い出したら報告します。以上です」

「……………なるほど、わかったわ。じゃあ、これとこれとこれ、よろしくね」

二枚の紙を渡してからミシエルはフェンの手首から手を放した。

フェンは紙を見てから、うち二枚を返す。

二枚の紙にはそれぞれ、手配魔獣とアルモニカ村の柵の修理と依頼内容が書かれていた。

「昨日、村の人に頼まれたのでやっちゃいました。てなわけでアツデュー。ツルツパゲッ」

「まだふさふさよっ！ 失礼ね！」

「あっは」

手さえ離ればこちらのもんだ。

面倒事を押し付けられる前に、フェンは軽い身のこなしでギルドのドアから外へと逃げていく。

##

楽屋で一人精神統一している最中に、窓から入ってきた自分そっくりな顔を持つ少女を見て、リーシャは呆れのあまりため息を吐いた。

「てなわけで、来ちゃいましたアルカンシエル！」

「来ちゃいました、じゃないよフェン。本当にびっくりしたんだからね」

昨夜、初めて会い話した双子の妹。その常識はずれな行動にリーシャはむっとした顔で言う。

誰かが窓に近づく気配は感じていた。

誰か、まではわからなかったため万が一に備えて警戒していたが――困った笑顔を浮かべて「鍵開けて」と窓を叩くフェンを見て、脱力した。びっくりしたというよりも呆れた。

しかし、窓を叩かれてびっくりしないという話もおかしいのであってびっくりしたことを強調。

妹であるフェンはリーシャの内情など露知らず、えへへと照れ笑いしている。

緩みに緩んだ、安心しきったフェンの笑顔がなんだかむず痒い。信頼に満ちた顔がリーシャの調子を狂わせる。

「もう……。そういえば、遊撃士の仕事はどうしたの？ クロスベ

ル支部の人たちはずいぶん多忙みたいだけど……」

「すっぱかしたよー！」

「元気に言うことじゃありません」

ああ、なんでこの子、遊撃士になれたんだろう。

最初に見たときもとても遊撃士とは思えない言動だったし。

正直、フェンから遊撃士であることを聞かされたときには信じられなかった。遊撃士の証である『支える籠手』のエンブレムを見て、ようやく信じたくらいである。

とりあえず、リーシャはフェンの額にデコピンをした。

「あいたっ」

「サボっちゃダメだよ。今度サボったらデコピン二回だからね」

「うっう……お姉ちゃんが冷たい……。いや！　これが愛の鞭ってやつだね！　よっしゃ、どんと来い！」

本当に、どうしたものか。

何をやっても逆効果になりそうな状況に、リーシャは内心ため息を吐いた。

別に、嫌なわけじゃない。

でも遊撃士の仕事をサボり続ける妹をほったらかしにするわけにもいかない。

とにかく、この子だけは真っ当に生きて欲しいのだ。

だから、リーシャは心を鬼にした。

（私には、口でこの子をどうにかできない）

迅速に、かつ正確に。

幸い、今楽屋に近づく人間はいない。

（だから――）

ごめんね、フェン。

私にはこうすることしかできないの。

（思いきり、経絡を突くっ！）

「くはっ……っ」

リーシャは直立の姿勢から、コンマ一秒でフェンの経絡を突いた。あまりの速さにフェンは捉えられず、もろに突きをくらいゆっくりと膝から倒れる。

床に体がつく前にリーシャはフェンの体を支え、持ち上げた。握られた拳がグッジョブと親指だけ上に立っていることについては考えないことにした。

「本当にごめんね、フェン。でも、やっぱりサボりはよくないと思うの」

さらさらとポケットから出した筆と紙で手紙を書き、それをテープでフェンの刀に貼り付ける。

それから、リーシャはフェンの体を窓から外へと優しく寝かせた。穏やかな寝息を立てているフェンにもう一度だけ謝り、リーシャは楽屋の窓を閉めて、鍵をかける。

時計を見ると、稽古の時間まであと5分もない。

「は、はやくいかないとっ」

リーシャは楽屋から急いで出ていく。

罪悪感がないわけではないが、今は稽古だ。イリアさんを待たせて

は申し訳ない。

#

真つ赤な魔人。地中から突如飛び出したその腕。
特務支援課とフェンの体は紅い紅い手に掴まれていた。ギリギリと
締め付けられる。口から内臓が出そう。痛い痛い痛い痛いイタイイ
タイイタイイタイイタイ

あれ、これ、わたししぬ？

おねえちゃん、おねえちゃんごめん……っ！

「っ！」

とんでもなく嫌な感覚にフェンは飛び起きた。寝ていた場所から素早く離れ、手は星嵐の柄を握る。

アルカンシエルの楽屋の窓。カジノの裏。歓楽街の喧騒にアイスクリームの匂い。

油断なく辺りを見回し、そしてなんの危険もないことを確認するとフェンは気を少しだけ緩める。依然、星嵐の柄は掴んだままだ。

「……星嵐。私の周りに、誰かいた？」

いつものふざけた空気はない。一番危機管理が散漫に見えるフェンだが、その実危機管理能力は母が鍛えたこともありギルドでもピカイチだ。

今、フェンは確かな命の危機を感じた。

険しい声で星嵐に問う。

「……そっか。夢、それも悪夢の類いか」

うなされていたこと、周りには誰もいなかったことを星嵐から聞きフェンはようやく力を抜く。

あれほどの危機感がただの夢とは到底思えなかったが、それでも余計な警戒は神経を疲れさせるだけだ。

「ふう……それにしても、なんで私こんなところに寝て……え？ 私お姉ちゃんに追い出されたの？ ん、手紙があるって……ああ、

「これか」

お姉ちゃんって意外と力あるなあ。私、それなりに体重あるんだけど。

フェンは星嵐の柄に貼られていた紙を剥がして開く。寸前に閉じた。

「うーん。お姉ちゃんの手紙……」　　なんだか魅惑的だね。ああ、どうしよう星嵐！　読むのがもったいないんだけど！」

開いては閉じ、開いては閉じ。

ほぼ無臭だけれど仄かに香る、懐かしさを感じる匂い。紙のかかささとなる音が甘酸っぱい感覚をフェンに味わわせる。

「はあああ。やっぱり家族の匂いって安心する。今度お母さんに手紙送ってもらおうかなあ。味噌の匂いがするんだよね」

あとギルドの緑茶の匂い。

はふーんとゆるっゆるに表情を柔らかくしたフェンは小躍りを始める。

浮かれて手紙も読もうとしないフェンを戒めたのは、やはり星嵐だった。

ほぼ一直線。ちょうどフェンの両目の位置にまばゆい光を放ち目を眩ませる。

「うわっ、眩し！　わかったよ、ちゃんと手紙見るって」

星嵐に急かされ、フェンはゆっくり丁寧に手紙を開く。

筆で書かれた立派な文字。その内容は――

『拝啓、フェン・マ才殿。

遊撃士のお仕事はきちんと、サボらないでやること。休みをもらうときは手続きに乗っ取って。それができない限り、会いません。敬具

リーシャ・マオ』

「……………え」

つまり、遊撃士の依頼をきちんとやらないとお姉ちゃんはフェンに会わない……というよりも話さないということだ。

癒し系の雰囲気醸し出しておきながら、フェンの弱点を的確につくリーシャにフェンは恐れをなした。

そ、それは困る。まだまだ話したいことがあるのだ。というか無視されるのはかなり堪える。

「う、うう、うわぁーんっ！ お姉ちゃんの鬼畜ーっ！」

フェンは電光石火でギルドへと駆け出した。

サボりはいけません（後書き）

うーん。リーシャって家族にたいしてはどんな感じだろう、と思いながら書きました。
多分、ずばりと言って躰はしっかり（あれなんか違う）するんだろうなあと思います。

では、ここまで読んでいただきありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7785y/>

遊撃士の私と〇〇〇でアーティストなお姉ちゃん

2011年12月21日18時51分発行